

幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究事業
成果報告書
(令和4年度～令和6年度)

機 関 名 : 静岡県掛川市教育委員会

1. 事業実施の目的

＜事業実施の目的＞

1 本事業開始以前における掛川市の幼児教育と学校教育の接続の現状及び成果と課題

(1) 中学校区学園化構想の取組

平成 25 年度より「中学校区学園化構想」のもと、中学校区を「学園」と呼び、各学園内の園・小・中学校が、保幼小中一貫研究会を組織して連携を強化し、地域に根差した一貫性のある教育を行ってきた。その中で、中学校区の子供の保育や教育における情報共有及び研修が充実し、園と小中学校の連携を深め、教職員の資質・能力の向上に大きく寄与してきた。平成 29 年度には、この構想を生かしながら、「掛川市小中一貫教育推進基本方針」を策定し、地域と共に目指す子ども像を設定・共有し、その実現に向けた取組を進めた。令和 2 年度には、この基本方針に基づき、小中 9 年間を見通した「かけがわ型小中一貫カリキュラム」を編成し、活用を進めている。

このような取組を通して、学園内で幼児教育施設・学校・家庭や地域が一体となって子供を育てる体制づくりが進んできた。また、小中一貫カリキュラムの編成・活用により、教育活動全体を通して教科横断的な視点をもって小中の接続を進めるよう配慮し、市全体で質の高い小中一貫教育の推進につながっている。

しかし、小中の接続に比べ、幼小接続のためのカリキュラムの開発が進んでいない。小中一貫教育の重要性だけでなく、幼小接続をさらに強固かつ円滑なものにするため、掛川市の特色を生かした幼小接続のためのカリキュラムの開発が必要である。

(2) 乳幼児教育における連携

掛川市は、認定こども園化が進み、公立園は減少傾向にあり私立園が増加している。また、乳幼児教育においては、保育所や幼稚園、認定こども園、さらには小規模保育事業所や認可外保育所などの利用者が増え、多様な環境の中で保育・教育が展開されている。そのため、様々な幼児教育施設が連携できる組織の必要性が高まった。そこで、平成 28 年度、市民総ぐるみの教育を掲げる掛川市ならではの、公立と私立等が一体となった新たな教育研究組織である「かけがわ乳幼児教育未来学会」を設立した。令和 3 年度 7 月現在、51 施設（認可施設・認可外施設）、716 人が会員となっており、公私立等の形態を越え実践研究を展開することにより、「質の高い保育・教育」をつくりだすことができている。

乳幼児教育における連携が進み、様々な幼児教育施設の保育者が一緒になって研修を深めているが、保育者の学校教育への理解はまだ進んでいない。また、教員の幼児教育への理解も同様である。保育者と教員が、幼児教育と学校教育のつながりやそれぞれの教育に対する理解を進めていく必要がある。

(3) 幼小の円滑な接続

「中学校区学園化構想」等の取組により、市内のほとんどの幼児教育施設と小学校で、幼児と児童あるいは教職員間の交流が進み、幼小の連携が図られてきた。また、令和元年度から、市内の幼児教育施設（認可施設）の保育者と小学校の教員を対象とした「掛川市幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けた研修会」を実施し、園ではアプローチカリキュラムを、小学校ではスタートカリキュラムをそれぞれ作成している。しかし、カリキュラムの作成に留まり、園と学校の共通理解のもと相互に関連付けた活用実践には至っていない。

そこで、令和 2 年度「園小中一貫教育研究委員会」を設置し、より実践的な幼小の円滑な接続に関して研究する中で、以下のような課題が明らかになった。

1 つ目は、保育者と学校教員が、それぞれの幼児教育と学校教育に対する共通理解が進んでいないことである。園児と児童の交流、保育者と教師同士の交流、園から小学校への

申し送り等に留まり、接続には至っていない。保育者と教員が、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、より長期的な視野に立った連携・協働を進め、幼児期から児童期への育ちのつながりをもとに、互いの教育内容、指導方法の違いや共通点に対する理解を進めていく必要がある。

2つ目は、カリキュラム・教育方法の充実・改善である。園ではアプローチカリキュラムを、小学校ではスタートカリキュラムをそれぞれ作成してきたが、学校教育では、幼児期に育まれている資質・能力について考慮されていないことが多く、小学校側の視点のみのカリキュラムになっていることが多い。幼児教育での育ちを生かしながら、学校教育での学びにつなげていくため、保育者と教員が、園や小学校での子供の生活の流れや活動について共通の土台の上で理解を深めていく工夫が必要である。

それらの課題を解決していくため、令和3年度、「園小中一貫教育研究委員会」において研究を進め、「かけがわ型育ちと学びのジョイントブック」を策定した。生涯にわたる学びや生活の基盤をつくるために重要な時期である5歳児から小学校1年生の2年間を中心とした、幼小の接続について、このジョイントブックを全保育者と全教員の手掛かりとして活用しながら、掛川市ならではの実践に向けてスタートしたところである。

(4) 乳幼児期から青年期（0歳から15歳）までを見通した学び

乳幼児期から義務教育終了（0歳から15歳）までにおける子供の成長には、家庭の役割は大変重要である。そこで、令和3年度「かけがわ家庭の学びグランドデザイン」を策定した。同時に、コンテンツとリンクを集めたWebサイト「かけがわ家庭の学びポータル」を作成した。家庭や地域との一層の連携、協働を進め、子ども自らの学びを引き出すための望ましい家庭のかかわり方や地域の役割について理解を深めていく必要を感じ、市民総ぐるみで家庭の学びについて考えていこうと取り組み始めたところである。

2. 事業目的

1の本市の現状を踏まえ、本事業の目的を以下に整理した。

- (1) 幼児教育の学びの芽生えを学校教育の学びの基礎へつなぐため、令和3年度に作成した「かけがわ型育ちと学びのジョイントブック」を基に、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムを一体的に捉えた「かけがわ型架け橋カリキュラム」（5歳児から小学校1年生の2年間）の開発、実践、改善・発展を図る。
- (2) 幼児教育施設の保育者と学校の教員が互いの教育について相互理解することを促進し、それぞれの良さを取り入れた教育内容や方法の工夫及び改善・充実に図る。

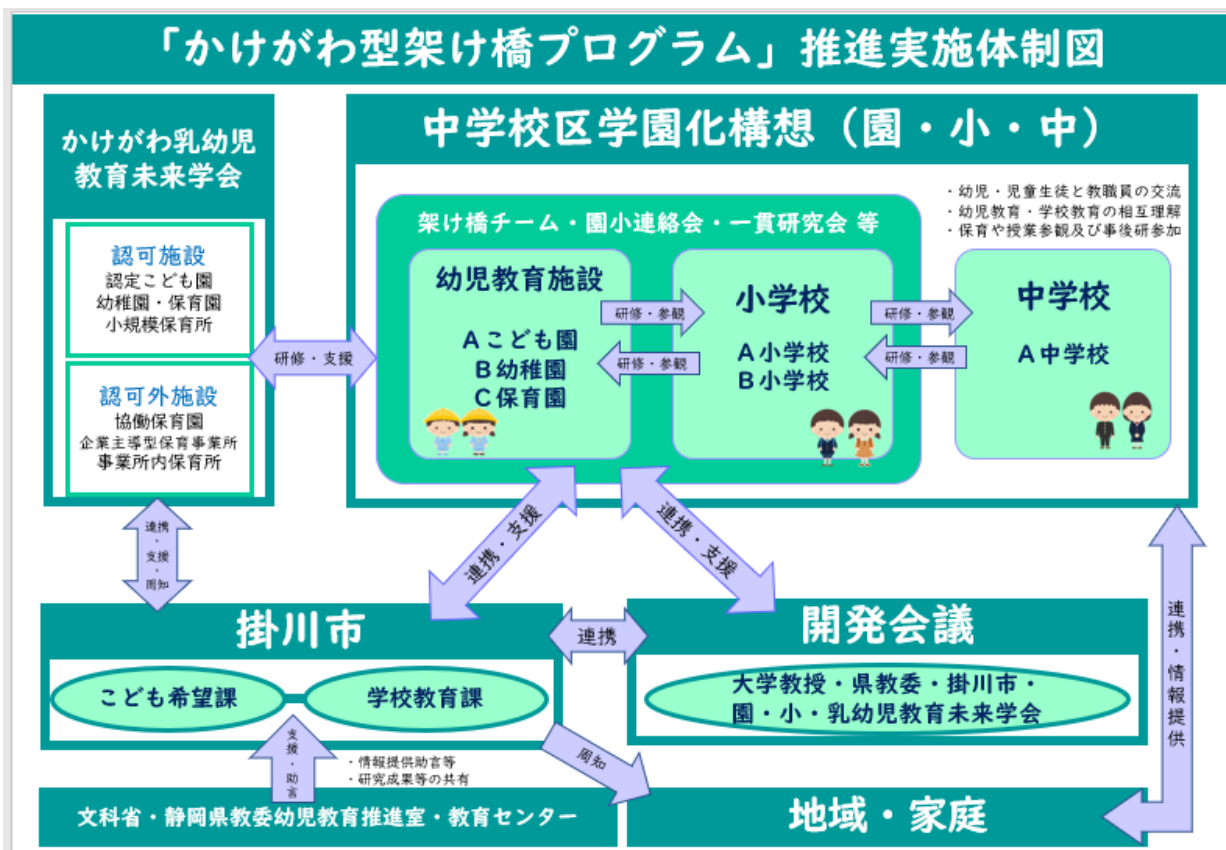
<園・小学校の施設数等>

	幼稚園			保育所		幼保連携型 地域裁量型		小学校		
	国立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立
施設数	0	2	2	0	9	1	12	0	22	0
園児・児童数	0	105	369	0	905	220	1977	0	6289	0

2. 事業実施に当たっての体制づくり

2-1. 組織図・体制図

<組織図・体制図>



（架け橋期のカリキュラム開発会議）

静岡大学教育学部発達教育学専攻教授、静岡県教育委員会義務教育課教育主任、かけがわ乳幼児教育未来学会理事、市内小学校長、市内園長といった有識者で構成。架け橋期のカリキュラムの開発等について協議する会議体。

<体制づくりの進め方>

掛川市教育委員会学校教育課が主担当となり、掛川市こども希望部こども希望課と連携しながら体制づくりを進めた。

こども希望課には、園長経験者である主席指導主事がいる。令和4年度からは、こども育成支援係に園長等保育者経験者の指導主事が加わり、複数体制となった。本研究事業の担当を、学校・保育の現場出身の教職員同士が担うことで、スムーズに連携することができた。

また、掛川市では、令和元年度より、保育者と教員を対象とした「幼児教育と学校教育の円滑な接続に向けた研修会」を学校教育課とこども希望課の共催で実施している。

さらに、令和2年度から令和3年度にかけ「園小中一貫教育研究委員会」を設置し、学校教育課とこども希望課が事務局となり、より実践的な園小の円滑な接続に関して研究した。

これらの経緯があり、こども希望課との連携についての課題はなく、連携を強化しながら、体制づくりを進めることができた。

2-2. 協力園・協力校

<協力園・協力校の概要>

設置者	施設類型等	園名・校名	幼児・児童数等	接続園校のグループ
私立	認定こども園 幼保連携型	掛川こども園	計 171 名 0 歳児 4 名、1 歳児 15 名、 2 歳児 25 名、3 歳児 36 名、 4 歳児 44 名、5 歳児 47 名	A
私立	認定こども園 幼保連携型	おおさかこども園	計 189 名 0 歳児 8 名、1 歳児 23 名、 2 歳児 29 名、3 歳児 39 名、 4 歳児 38 名、5 歳児 52 名	B
公立	小学校	掛川市立桜木小学校	計 685 名 1 年生 114 名、2 年生 103 名、 3 年生 113 名、4 年生 121 名、 5 年生 111 名、6 年生 123 名	A
公立	小学校	掛川市立大坂小学校	計 339 名 1 年生 44 名、2 年生 45 名、 3 年生 63 名、4 年生 66 名、 5 年生 59 名、6 年生 62 名	B

<協力園・協力校の指定プロセス>

1-1(1)で述べた学園の内、2 学園からそれぞれ私立こども園 1 園、公立小学校 1 校を研究指定園・小学校とした。掛川市には、「一園から一校へ入学」と「複数園から一校へ入学」の両方があるため、そのモデルとなるように 2 校を指定した。

大坂小学校とおおさかこども園は隣接しており、ほぼ全ての卒園児が大坂小学校に入学する。桜木小学校には、複数園から入学するが、一番卒園児が多い掛川こども園を研究指定園とした。また、1-1(2)で述べた掛川市の現状から、「かけがわ乳幼児教育未来学会」とのこれまでの連携により、私立こども園を研究指定園とすることもスムーズにできた。

<自治体と協力園・協力校の連携・協働の取組>

1 研究指定園・小学校が研究を進めるにあたり必要な支援をした。

(1) 研究指定園・小学校の保育者と教員を対象とした「架け橋期の幼小接続に関する講演会」の実施

・桜木小会場 令和 4 年 11 月 25 日 講師：静岡大学教育学部田宮縁教授
参加者：桜木小職員 35 人、掛川こども園保育者 23 人、
桜木こどもの森保育者 3 人、県教育委員会義務教育課 1 人、
事務局 2 人

・大坂小会場 令和 5 年 2 月 8 日 講師：静岡大学教育学部田宮縁教授
参加者：大坂小職員 25 人、おおさかこども園保育者 7 人、
市内幼児教育施設保育者 38 人、小中学校教員 13 人、
県教育委員会義務教育課 1 人、事務局 5 人

(2) 視察研修の実施

- ・ 富士市立松野こども園、富士市立富士川第二小中一貫校松野学園小学部
令和5年11月21日（火） 開発会議委員7名、事務局4名
- ・ 宮城県白石市立南保育園、白石市立大平小学校、白石市立第二小学校
令和5年12月19日（火） 開発会議委員2名、事務局4名
- ・ 京都市幼保小架け橋シンポジウム（京都市立御所南小学校、京都市立中京もえぎ幼稚園等）
令和7年2月14日（金） 開発会議委員1名、研究指定校教諭1名

(3) 園児・児童の交流におけるバス利用

隣接していない掛川こども園と桜木小学校の子供同士が交流活動をする旅費を助成した。

- ・ 掛川こども園年長児と桜木小学校1年生が、宇刈里山公園で交流活動（秋探し等）
令和5年10月27日（金）、令和6年10月31日（木）
- ・ 掛川こども園年長児と桜木小学校1年生が、桜木小学校で交流活動（学校見学等）
令和5年12月6日（水）、令和6年12月3日（火）

(4) 園小接続につながる環境整備の助成

ア 幼児教育における環境整備

- ・ 小学校の生活科や国語等につながる絵本の配付及び絵本棚の設置
- ・ 軸が太くて握りやすい鉛筆を配付することで、鉛筆を持って遊びの中で自由に描くことができる環境づくり

イ 小学校教育における環境整備

幼児教育の環境を小学校教育でも生かすことで、子供が安心して生活・学習することができるとともに、幼児期の育ちや学びをつなげる環境づくりを推進した。

- ・ プレイマットやローテーブル等を設置した生活科室での授業実践
- ・ 教室やホールにプレイマットやローテーブル等を設置し、学習につながる絵本や遊びコーナーの設置
- ・ 使いたい材料や道具等を自分で選び、すぐに活動できる環境づくり
- ・ 屋内外でダイナミックな活動ができる道具等の活用

2 開発会議において、研究指定園・小学校の保育・授業案の検討、保育・授業参観、事後協議を行い、研究指定園・小学校への支援及び助言を行った。

（3. 架け橋期のカリキュラム開発会議 3-2. 開催実績を参照）

＜協力園と協力校同士の連携・協働の取組＞

1-1(1)で述べた「中学校区学園化構想」のもと、中学校区の子供の保育や教育における情報共有及び研修が充実し、園と小学校の縦のつながりを深めた。

また、開発会議の協議の中で実践状況や課題について情報共有することで、研究指定園同士・研究指定小学校同士の横のつながりも深まった。

2－3. 協力団体等

<協力団体等の概要>

団体等名	団体等の活動概要
かけがわ乳幼児教育未来学会	総会を年1回以上開催、理事回を年3回開催。 各研究部による研修会や講演会を年数回実施。

<各協力団体等との連携>

- 1 開発会議の委員に、公私立を問わず市内乳幼児教育施設が加盟している「かけがわ乳幼児教育未来学会」の理事を選出した。
- 2 「かけがわ乳幼児教育未来学会」の総会や理事会において、事務局が架け橋プログラムの取組状況の報告を行った。
- 3 「かけがわ乳幼児教育未来学会」の総会や各研究部による研修において、園小接続に関する講演等を実施するとともに、園小接続に関する研修への学校の教員の積極的な参加を促した。（以下、3年間での園小接続に関する総会・研修）
 - (1) 総会
 - ア 令和5年5月20日
講演 「乳幼児教育と小学校教育の架け橋をさらに深めるために」
講師 秋田 喜代美 氏（学習院大学 文学部 教育学科 教授）
 - イ 令和6年5月18日 午後1時30分から4時30分
講演 「幼児教育と小学校教育をつなぐ架け橋プログラムとは」
講師 無藤 隆 氏（白梅学園大学 名誉教授）
 - (2) 各研究部による研修
 - ア 令和5年 9月19日 キャリアアップ研究部幼児教育分野
講演 「小学校との接続」
講師 永倉 みゆき 氏（静岡県立大学 短期大学部 教授）
 - イ 令和6年10月29日 園経営研究部
講演 「乳幼児教育と小学校教育の連携」
講師 北野 幸子 氏（神戸大学大学院 教授）
 - ウ 令和6年 7月25日 発達支援研究部
講話 「ことばの教室から見た園から小学校への滑らかな接続とは」
講師 榛葉 美哉子 氏（大坂小学校言語通級指導教室 教諭）

２－４．架け橋期のコーディネーター等

＜架け橋期のコーディネーター等の概要＞

該当なし

新規／継続	事業に関わった 年度	役職名	経歴
(例) 新規	令和４～６年度	架け橋期のコーディネーター	元公立小学校長、幼稚園での勤務経験あり

＜架け橋期のコーディネーター等の役割等＞

該当なし

3. 架け橋期のカリキュラム開発会議

3-1. 会議委員等

<会議委員一覧>

会議の代表者氏名		田宮 縁	他 34 名（実人数）
会議委員氏名	所属機関 所属・職名	具体的な役割分担	従事期間
田宮 縁	静岡大学教育学部 発達教育学専攻教授	助言・支援 カリキュラム協議・作成	令和4年7月～5年3月 令和5年5月～6年3月 令和6年5月～7年3月
三輪 直司	静岡県教育委員会 義務教育課・教育主任	助言・支援 カリキュラム協議・作成	令和4年7月～5年3月 令和5年5月～6年3月 令和6年5月～7年3月
小澤 直明	かけがわ乳幼児教育 未来学会理事	助言・支援 カリキュラム協議・作成	令和4年7月～5年3月 令和5年5月～6年3月 令和6年5月～7年3月
永井 和典	掛川市立佐東小学 校長	助言・支援 カリキュラム協議・作成	令和4年7月～5年3月
鈴木 康浩	掛川市立上内田小 小学校長	助言・支援 カリキュラム協議・作成	令和5年5月～6年3月 令和6年5月～7年3月
平野 理枝子	掛川市立中小学校 教頭	学校教育に関すること カリキュラム協議・作成	令和4年7月～5年3月 令和5年5月～6年3月
	掛川市立第一小学校・教頭		令和6年5月～7年3月
山梨 規子	掛川市立すこやか こども園長	幼児教育に関すること カリキュラム協議・作成	令和4年7月～5年3月 令和5年5月～6年3月 令和6年5月～7年3月
岡田 博次	桜木こどもの森 園長	幼児教育に関すること カリキュラム協議・作成	令和4年7月～5年3月 令和5年5月～6年3月 令和6年5月～7年3月
原田 留奈	掛川こども園 園務主任	幼児教育に関すること カリキュラム協議・作成・実践	令和4年7月～5年3月 令和5年5月～6年3月 令和6年5月～7年3月
鈴木 有里紗	掛川こども園 5歳児主任	幼児教育に関すること カリキュラム協議・作成・実践	令和5年5月～6年3月
小倉 美保子	掛川こども園 5歳児担任	幼児教育に関すること カリキュラム協議・作成・実践	令和6年5月～7年3月
鈴木 雅子	おおさかこども園 園務主任	幼児教育に関すること カリキュラム協議・作成	令和4年7月～5年3月
小林 晃子	おおさかこども園 園務主任	幼児教育に関すること カリキュラム協議・作成・実践	令和5年5月～6年3月
一柳 香織	おおさかこども園 園務主任	幼児教育に関すること カリキュラム協議・作成・実践	令和6年5月～7年3月
植田 里美	おおさかこども園 5歳児主任	幼児教育に関すること カリキュラム協議・作成・実践	令和5年5月～6年3月 令和6年5月～7年3月
金子 紋也	掛川市立桜木小学校 主幹教諭	学校教育に関すること カリキュラム協議・作成	令和4年7月～5年3月

笹瀬 知沙	掛川市教育委員会 学校教育課・指導主事	事務局	令和4年7月～5年3月
	掛川市立桜木小学校 主幹教諭	学校教育に関すること カリキュラム協議・作成・実践	令和5年5月～6年3月 令和6年5月～7年3月
市川 綾音	掛川市立桜木小学校 1年担任	学校教育に関すること カリキュラム協議・作成・実践	令和5年5月～6年3月
夏目 亜佑美	掛川市立桜木小学校 1年担任	学校教育に関すること カリキュラム協議・作成・実践	令和6年5月～7年3月
堀池 久美	掛川市立大坂小学校 教務主任	学校教育に関すること カリキュラム協議・作成	令和4年7月～5年3月
岡戸 良太	掛川市立大坂小学校 教務主任	学校教育に関すること カリキュラム協議・作成・実践	令和5年5月～6年3月 令和6年5月～7年3月
小林 万浦	掛川市立大坂小学校 1年主任	学校教育に関すること カリキュラム協議・作成・実践	令和5年5月～6年3月 令和6年5月～7年3月
石田 梨江子	掛川市こども希望 課長	事務局	令和4年7月～5年3月 令和5年5月～6年3月
岡田 正浩	掛川市こども希望 課長	事務局	令和6年5月～7年3月
齊藤 加代子	掛川市こども希望課 主席指導主事	事務局	令和4年7月～5年3月 令和5年5月～6年3月 令和6年5月～7年3月
福島 純子	掛川市こども希望課 指導主事	事務局	令和4年7月～5年3月 令和5年5月～6年3月
角皆 紀子	掛川市こども希望課 指導主事	事務局	令和5年5月～6年3月 令和6年5月～7年3月
杉本 由起子	掛川市こども希望課 指導主事	事務局	令和6年5月～7年3月
柳瀬 昭夫	掛川市教育委員会 学校教育課長	事務局	令和4年7月～5年3月
小関 昌典	掛川市教育委員会 学校教育課長	事務局	令和5年5月～6年3月 令和6年5月～7年3月
染葉 美智子	掛川市教育委員会 学校教育課・主席指導主事	事務局	令和4年7月～5年3月 令和5年5月～6年3月
後藤 志津子	掛川市教育委員会 学校教育課・主席指導主事	事務局	令和6年5月～7年3月
増田 七奈子	掛川市教育委員会 学校教育課・指導主事	事務局	令和4年7月～5年3月 令和5年5月～6年3月 令和6年5月～7年3月
鈴木 晶子	掛川市教育委員会 学校教育課・指導主事	事務局	令和5年5月～6年3月
宮谷 恵理	掛川市教育委員会 学校教育課・指導主事	事務局	令和6年5月～7年3月

＜会議委員の決定プロセス＞

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、幼児期から児童期への育ちのつながりを理解し、目指す方向性の共有を進めながら、5歳児と小学校1年生の2年間のカリキュラムを一体的に捉えた「かけがわ型架け橋カリキュラム」の検討及び開発への支援を行うことを目的に、かけがわ型架け橋カリキュラム開発会議を新設した。

開発会議委員には、有識者である、静岡大学教育学部発達教育学専攻教授を委員長、2－3で述べた「かけがわ乳幼児教育未来学会」の理事と公立小学校長を副委員長に選出した。静岡県教育委員会義務教育課幼児教育推進室教育主任をアドバイザーとし、県の支援・助言を受けた。

また、小学校教頭代表、公立及び私立園代表園長を委員に選出し、市内の園・小学校代表者から幼児教育及び学校教育についての意見を頂戴した。

さらに、研究指定園・小学校での推進を図るため、研究指定園の園務主任及び研究指定校の主幹教諭または教務主任を選出した。令和5年度からは、保育及び授業実践も含めたカリキュラム開発を行うため、研究指定園の5歳児担任または5歳児主任、研究指定校の1年主任または1年担任も加わった。

3-2. 開催実績

<開催実績>

令和4年度		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
第1回 令和4年8月30日 15時～16時30分	・「かけがわ型架け橋カリキュラム」の開発について（本研究の内容、本年度の計画） ・掛川市のフェーズについて ・研究指定園・小学校の現状	掛川市の幼児教育と学校教育の接続の現状と課題及び研究指定園・小学校の現状を共有し、今後の本研究の内容について共通理解を図った。
第2回 令和4年9月27日 15時～16時30分	・「かけがわ型架け橋カリキュラム」について	事務局案を基に、目指す子供の姿の項目についてや園と小学校の活動内容について等、カリキュラムの項目について検討した。
第3回 令和4年10月18日 15時～16時30分	・「かけがわ型架け橋カリキュラム」の捉え方について ・幼児教育と学校教育のつながりについてのグループ協議	「かけがわ型架け橋カリキュラム」の捉え方について検討を行い、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムを含めた5歳児から小学校1年生の2年間を「架け橋期全体のカリキュラム」とし、幼児期の育ちや学びを小学校教育につなげるためのカリキュラムであると捉えることが決定した。
第4回 令和4年11月21日 15時～16時30分	・幼児教育と学校教育のつながりについて ・「かけがわ型架け橋カリキュラム」の「ジョイント活動」について	前回のグループ協議を踏まえて、園の「夏野菜を育てよう」と小学校の「元気に育てわたしのはな」の活動について冊子にまとめる内容を検討した。このような、園小接続のポイントとなる、園での経験が小学校の学びにつながる活動を『ジョイント活動』と捉えることが決定した。
第5回 令和4年12月16日 15時～16時30分	・幼児教育と学校教育のつながりについて ・「かけがわ型架け橋カリキュラム」の様式について	園の「秋の自然物を使って遊ぼう！」と小学校の「あきとなかよし」の活動について冊子にまとめる内容を検討した。これまでの協議を踏まえて事務局が作成したカリキュラム案について検討し、大枠が決定した。
第6回 令和5年2月14日 15時～16時30分	・『かけがわ型架け橋カリキュラム』作成に向けて～幼児教育を学校教育へつなぐ～（冊子）について ・「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver.1」について ・来年度の開発会議について	本年度の開発会議協議を踏まえて作成した冊子の内容について検討した。研究指定園・小学校が作成した「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver.1」を共有し、来年度運用することが決定した。

令和5年度		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
第1回 令和5年5月9日 15時～16時30分	・「かけがわ型架け橋カリキュラム」の開発について（本研究の内容、昨年度の取組、本年度の計画） ・研究指定園・小学校の「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver.1」の運用状況について ・掛川市のフェーズについて	今年度の開発会議において、研究指定園・小学校の保育・授業を参観するにあたり、子供を見とるポイントや保育・授業づくりで意識するポイントを検討した。研究指定園・小学校の「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver.1」の運用状況をもとに、掛川市のフェーズについて検討した。
第2回 令和5年6月13日 15時～16時30分	・研究指定園・小学校訪問について ・「ジョイント活動」（なつとなかよし）について	おおさかこども園の公開保育の月案・日案及び大坂小学校の公開授業の単元計画を基に、子供の活動、保育者の援助や教師の支援、環境づくりについて検討した。
第3回 令和5年7月4日 13時～16時	・研究指定校（大坂小）の授業参観 ・6月30日の研究指定園（おおさかこども園）保育参観振り返り ・本日の授業参観振り返り ・幼児教育と学校教育のつながりについて	おおさかこども園保育参観及び大坂小学校授業参観の振り返りをし、幼児教育と学校教育のつながりについて協議した。園小接続に向けての気付きとして、主に「環境設定」「友達との関わり」「幼児教育の土台があってこそその学校教育」の3点挙げられた。
第4回 令和5年9月8日 15時～16時30分	・「ジョイント活動」（あきとなかよし）について	掛川こども園の公開保育の週案及び桜木小学校の公開授業の単元計画を基に、子供の活動、保育者の援助や教師の支援、環境づくりについて検討した。
第5回 令和5年11月10日 13時～16時	・研究指定校（桜木小）の授業参観 ・10月31日の研究指定園（掛川こども園）保育参観振り返り ・本日の授業参観振り返り ・幼児教育と学校教育のつながりについて	掛川こども園保育参観及び桜木小学校授業参観の振り返りをし、第3回の協議内容を深めた。特に、主体的な遊び・学びになるための「環境設定」が大切であることや、新たに「子供理解」の視点が挙げられた。
第6回 令和5年12月11日 15時～16時30分	・研究指定園・小学校の「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver.1」の運用状況について ・「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver.1」運用の成果と課題について	研究指定園・小学校の実践状況や課題、実践による指導や子供の変化について共有した。カリキュラム運用の課題として、全職員の意識向上、持続可能な体制づくり、職員の交流等が挙げられた。

第7回 令和6年2月5日 15時～16時30分	・「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver.1」について ・来年度の研究指定園・小学校の取組について	今年度の開発会議協議で出された成果と課題を踏まえて、来年度の研究指定園・小学校の取組について、「園・校体制の取組」と「保育・授業づくり」の視点で検討し、方向性を明らかにした。
令和6年度		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
第1回 令和6年5月9日 15時～16時30分	・「かけがわ型架け橋カリキュラム」の開発について（本研究の内容、昨年度までの取組、本年度の計画） ・研究指定園・小学校の「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver.1」の運用状況について ・掛川市のフェーズについて	研究指定園・小学校の「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver.1」の運用状況や昨年度の市内園・校のアンケート調査結果等をもとに、掛川市のフェーズについて協議した。今後、学園・園・校で持続可能な体制となるよう本会議で協議することが決定した。
第2回 令和6年6月14日 13時～16時	・研究指定校（大坂小）の授業参観 ・6月6日の研究指定園（おおさかこども園）保育参観振り返り ・本日の授業参観振り返り ・幼児教育と学校教育のつながりについて	おおさかこども園保育参観及び大坂小学校授業参観の振り返りをし、昨年度の協議内容を深めた。子供が夢中になる環境設定、園での子供の経験を知る、「学びの芽生え」から「自覚的な学び」への教師の意図的な声掛け等について協議した。
第3回 令和6年7月16日 15時～16時30分	・これまでの協議内容及び研究指定園・小学校の取組を踏まえ、市全体へ周知する内容についてのグループ協議	2グループに分かれて、「園・校体制の取組」、「保育・授業づくり」について市全体へ周知する内容を検討した。園・校体制にするために学園を活用することが決定した。また、互いの教育を理解した上で保育・授業をつくることの大切さを共有した。
第4回 令和6年9月2日 15時～16時30分	・第3回開発会議協議内容をもとに、市全体へ周知する内容についてのグループ及び全体協議	カリキュラムの項目に、子供同士・職員同士の交流も入れることや、学園で統一した「ジョイント活動」を位置付けることが決定した。また、園・校体制にするために学園に接続部会を設置し、学園の取組を組織化することや、保育・授業づくりに加えて環境づくりについて市に周知することが決定した。

第5回 令和6年10月8日 13時～16時	・研究指定校（桜木小）の授業参観 ・10月4日の研究指定園（掛川こども園）保育参観振り返り ・本日の授業参観振り返り ・研究指定園・小学校の実践での子供の姿と保育者・教員の手立て（援助・指導等）について	これまでの開発会議協議を踏まえた、来年度から取り組む内容案の「保育・授業づくりについて」を基に、掛川こども園と桜木小学校の実践でどのような子供の姿や保育者・教員の手立て（援助・指導等）があったのかを協議した。子供が園で経験したことを小学校が知り、授業及び環境づくりにつなげていたこと、特に生活科を中心に合科的・関連的な指導が有効であったことを共有した。
第6回 令和6年11月8日 15時～16時30分	・冊子（案）について ・「かけがわ型架け橋カリキュラム」について ・周知方法について	これまでの協議を踏まえて事務局が作成した冊子案及び「かけがわ型架け橋カリキュラム」について検討した。令和6年度末から令和7年度初にかけて、市内園・校への周知方法について大枠が決定した。
第7回 令和6年12月13日 15時～16時30分	・冊子（案）について ・「かけがわ型架け橋カリキュラム」について	前回の開発会議協議を踏まえて修正した冊子案及び「かけがわ型架け橋カリキュラム」について検討した。冊子案については、教職員が子供の捉え方を変えて接したことで子供の姿に様々な変容が見られたこと、保育・授業づくりについては順番や記載内容を揃えることで繋がりが見やすくなること等を協議した。「かけがわ型架け橋カリキュラム」については、委員の合意形成が図られ、決定した。
第8回 令和7年2月3日 15時～16時30分	・冊子（案）について ・開発会議協議まとめ	前回の開発会議協議を踏まえて修正した冊子案を事務局から説明し、委員の合意を得ることができ、決定した。開発会議協議のまとめとして、事務局から3年間の調査研究事業の成果を報告した。最後に、委員から開発会議に参加し考えたことや自身の意識や取組が変容したこと、今後取り組みたいこと等について話をしてもらい、開発会議の成果を共有した。

3-3. 成果と課題

＜架け橋期のカリキュラムに関する議論＞

まず、開発会議で「かけがわ型架け橋カリキュラム」の捉え方について協議した。「かけがわ型架け橋カリキュラム」は、5歳児のアプローチカリキュラムと小学校1年生の入学当初から夏休み前までのスタートカリキュラムを含めた、5歳児及び小学校1年生の2年間の「架け橋期全体のカリキュラム」とし、幼児期の育ちや学びを小学校教育につなげるためのカリキュラムであると開発会議委員で共通理解し、押さえた。

また、「かけがわ型架け橋カリキュラム」の在り方について検討した。園小共通の項目として、どのような項目があると、より園小の接続を意識し、つなげることになるか、何度も協議を重ねた。協議で話題になった主な内容は、以下3点である。

- ・掛川市では、中学校区ごと学園の目指す姿があるため、学園ごとどんな子供を育てていきたいかがわかるようなカリキュラムにしてはどうか。
- ・幼児期から高等学校まで整理された、3つの資質・能力を記載してはどうか。
- ・幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は、園小接続の手掛かりになるため、カリキュラムに入れたい。

令和4年度の開発会議の協議にて「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver. 1」の型を完成させた。（資料1）そして、研究指定園・小学校で作成した「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver. 1」を、令和5・6年度に実際に研究指定園・小学校において運用していく中で、園小接続のためにより活用できるものになるよう検証・改善を図ることに決まった。

＜会議設置による成果と課題＞

３－１ 会議委員等で述べたとおり、開発会議委員を、静岡大学教育学部発達教育学専攻教授、静岡県教育委員会義務教育課教育主任、かけがわ乳幼児教育未来学会理事、市内小学校長、市内園長といった有識者で構成し、幼児教育及び学校教育に携わる様々な立場の方から助言、支援をいただいた。

令和４年度の開発会議協議において作成した「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver. １」の型を基に、研究指定園・小学校で「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver. １」を作成した。

令和５年度及び令和６年度は、研究指定園・校で「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver. １」を運用し、園小接続のためにより活用できるものに改善していくために、開発会議の委員の中に、研究指定園の５歳児担任や研究指定校の１年主任及び１年担任を選出し、園・小学校の状況や課題を開発会議で把握し、必要な援助をすることができた。

また、令和５年度及び令和６年度は、開発会議委員が実際に研究指定園・小学校の保育及び授業を参観し、子供の姿や保育者・教員の手立て（援助・指導等）について開発会議で協議をした。

開発会議の協議内容が深まり、委員の意識の高まりや幼児教育及び学校教育への理解が促進される一方、この内容を、どのように市内の保育者及び教員に周知するかが課題となった。

そこで、研究指定園・小学校の取組を踏まえた市全体へ周知する内容について、「園・校体制の取組」と「保育・授業づくり」の２つに分けてグループ協議をすることにした。協議を重ねるうちに、市全体に周知する内容が集約され、「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver. ２」の活用方法、園小接続に向けた組織体制づくり、保育・授業づくり等を「幼児期の育ちや学びを学校教育につなげる～『かけがわ型架け橋カリキュラム』活用に向けて～」(冊子)にまとめることができた。

(次ページ、令和６年度第８回開発会議協議での開発会議委員の言葉を参照。)

開発会議委員の言葉

【委員長 田宮 縁 氏より】

- 掛川市は、ジョイント活動という具体から研究を始めた。具体的な活動の抽象化が、他地域でも活用できる汎用性の高いカリキュラムとなった。
- 成果は、①協働してカリキュラムを開発するPBL（問題解決学習）を行った。
②繰り返し協議を重ねた（＝探究した）ことで高みに迫った。
③子供観が変容した。

開発会議の委員自身が、主体的・対話的で深い学びを体現した。

掛川市の教育は熱い！
掛川市に勤務する者としてうれしい！



【アドバイザー、副委員長、委員（研究指定園・校以外）より】

- 掛川市の園小の学びのつながりは、県内で注目されている。今後、掛川市作成の冊子は、県内で活用されるだろう。
- 園同士の横のつながりは非常にめずらしい。掛川市は、**かけがわ乳幼児教育未来学会で横につながり、学園で縦につながる**ことが可能である。来年度、未来学会園経営研究部で冊子の内容を広めていく。
- 現行の学習指導要領でも、幼小接続の大切さが明記されており、ますます大切になる。冊子の内容は、小学校の個別最適な学びや探究とつながり、**授業改善を促進**する。全職員が理解する必要があり、**全校で取り組む価値**がある。**教育の質を高める好機**になる。
- 掛川市は早くから幼小接続に着目していた。じわじわと縦のつながりが強まった。今後、どのように実践するかを、委員それぞれができることを見極めて取り組みたい。
- 自学園の職員の話合いも子供同士の交流も変化してきた。小学校入学後に「園の時はどうだった？」と子供の経験を聞き、学びをつなげてくれることは、**子供にとって幸せ**なことである。

冊子の内容を周知したい！

【研究指定園・校の委員より】

- 互いの考えを伝え合えた。園・小の距離が縮まり、職員の意識が変わった。
- 担当職員が変わっても、職員間の交流を継続させたい。
- 園から小学校へ送り出した子供の成長や学びがつながっていることを実感**できた。他の職員にもつなげていく。
- 幼児教育を知ることによって学校教育でもできることが広がった。**架け橋の考え方を基盤に、「学びがつながる授業」を校内研修で取り組んでいく。**
園小中のつながりを意識したい。
- 小学校の教員が園を参観した際の感想が、表面的なものから中身のあるものになった。
- 今までの1年生担任の自分に、「**もっと1年生はできるよ。**」と言ってあげたい。



4. 架け橋期のカリキュラム

4-1. 開発プロセス

令和4年度の開発会議において、カリキュラムの検討を行いながら、各園・小学校で「かけがわ型架け橋カリキュラム」を作成することがゴールではなく、保育者と教員がカリキュラムを基に語り合い、本当に活用できるものにするためにはどのような項目があるとよいのか協議を重ねた。そこで、園児と児童の姿から、幼児教育と学校教育のつながりを開発会議の委員同士でグループに分かれて語り合う時間を設けた。

園の栽培の活動と小学校の植物の栽培の授業について話し合う中で、園と小で似たような活動でもねらいが違ふことや、園では子供の気付きから生まれる様々な活動があること、保育者の援助や環境設定の内容、小学校の授業はゴールがあることなど、互いの教育への理解につながる話ができ、接続のイメージが広がっていった。つながりを意識することで、接続の第一歩になると考え、掛川市では、園小接続のポイントとなる、園での経験が小学校の学びにつながる活動を「ジョイント活動」と捉えることにした。

幼児教育と学校教育のつながりがイメージできる例を発信していくために、「ジョイント活動」の例を2つ検討した。1つ目は、栽培から、園の「夏野菜を育てよう」と小学校の「げんきにそだてわたしのはな」の活動、2つ目は、自然との関わりから、園の「秋の自然物を使って遊ぼう」と、小学校の「あきとなかよし」である。

カリキュラムが形式的なものではなく、保育者や教員が「かけがわ型架け橋カリキュラム」を活用しながら一緒に語り合うことで、互いの教育への理解が促進されるよう、「かけがわ型架け橋カリキュラム」の中に「ジョイント活動」を位置付けることとした。

令和5年度及び令和6年度の開発会議で、研究指定園・小学校の実践の成果と課題を把握し、「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver. 1」の検証をした。年長児・1年生の目標が抽象的な表現になりやすいため、具体的に目指す幼児・児童の姿を共有することができるよう項目の位置を変更したり、職員同士・子供同士の交流の項目を位置付けたりした。園小接続のためにより活用できるものに改善し、「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver. 2」を完成させた。

(資料2)

4-2. 架け橋期のカリキュラムの概要

1 アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムと「かけがわ型架け橋カリキュラム」の相違点

園ではアプローチカリキュラムを、小学校ではスタートカリキュラムをそれぞれ作成してきたが、学校教育では、幼児期に育まれている資質・能力について考慮されていないことが多く、小学校側の視点のみのカリキュラムになっていることが多かった。また、カリキュラムの作成に留まり、園と学校の共通理解のもと相互に関連付けた活用実践には至っていなかった。

幼児教育での育ちを生かしながら、学校教育での学びにつなげていくため、保育者と教員が、園や小学校での子供の生活の流れや活動について共通の土台の上で理解を深めていく工夫が必要であった。

そこで、開発会議において協議を行い、5歳児のアプローチカリキュラムと小学1年生の入学当初から夏休み前までのスタートカリキュラムを含めた、5歳児及び小学1年生の2年間の「架け橋期全体のカリキュラム」とし、幼児期の育ちや学びを小学校教育につなげるためのカリキュラムであると捉えた。

2 「かけがわ型架け橋カリキュラム」の工夫した点

(1) 「ジョイント活動」の位置付け

カリキュラムが形式的なものではなく、保育者や教員が「かけがわ型架け橋カリキュラム」を活用しながら一緒に語り合うことで、互いの教育への理解が促進されるよう、「かけがわ型架け橋カリキュラム」の中に「ジョイント活動」を位置付けることとした。（4-1. 開発プロセス参照）

年度末に各園・小学校で作成する際は、実践できそうな「ジョイント活動」を複数位置付け、次年度の第1回学園接続部会において、子供の実態や担任の思いを踏まえて、学園で統一した「ジョイント活動」を一つ位置付けることとした。

(2) 目指す子供の姿

掛川市ならではの、中学校区ごと学園の目指す子供の姿と、掛川市が策定した「3つの創る力（創像力、創合力、創律力）」を位置付けた。「3つの創る力」については、保育者の理解を促進するため、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との主な関連性を明記した。

また、目指す子供の姿の項目を同色にし、上段から国、市、学園、園・小学校、年長児・1年生の目標と、徐々に具体化していくようにした。年長児・1年生の目標が抽象的な表現になりやすいため、その下の段に、育ってほしい幼児・児童の姿の項目を入れることで、具体的に目指す幼児・児童の姿を共有することができるようにした。

(3) 園小接続の配慮事項

小学校のカリキュラムには、園のカリキュラムの環境構成や援助・支援を踏まえて、園小接続の配慮事項を記入する項目を入れた。円滑な接続のためには欠かせない配慮事項を帯状に示し、全ての学校で共通して実践することを促した。

4-3. 架け橋期のカリキュラムの実践

1 研究指定園・小学校共通の実践

- (1) 「かけがわ型架け橋カリキュラム」を基に、連絡を取り合い情報交換しながら実践した。また、ジョイント活動や子供同士の交流について、5歳児学年主任・5歳児担任、主幹保育教諭、小学校主幹教諭・教務主任、1年生学年主任・1年生担任で話し合った。カリキュラムを見ながら、園の遊びが小学校の学びにどう繋がっていくのか話し合うことができた。

情報交換を行う中で、具体的にイメージできることもあったが、お互い知らない部分が多いことがわかった。そこで、実際に園・小学校へ出向き、子供たちの活動の様子や保育者・教員の関わりを参観し、それぞれの様子を具体的に把握することができた。参観することで改めて環境づくりの大切さや、保育者・教員の言葉の掛け方の工夫が必要であること等を感じ、相互理解につながった。

- (2) これまでは、園の公開保育の際、保育の様子を参観するだけであった。しかし、それだけでは園児が遊びを通して学んでいる様子や保育者の意図的な関わり、環境づくりなどを小・中学校の教員が理解するのが難しいと感じた。

そこで、公開保育前に、園長から遊びの中にどのような学びがあるか話をする時間を設け、その後、保育参観をすることにした。参観後は、園小中教員の混合グループをつくり、意見交換の時間を設定したことで、それぞれの立場で育ちが繋がっていることを実感する機会となった。

- (3) 「かけがわ型架け橋カリキュラム」を基に、子供同士の交流を実施したが、交流後、当日の動きなどもっと詳しく打ち合わせしておいた方が良かった等の課題があった。

そこで、2回目の交流の前には細部まで話し合いを重ねることで、当日は交流のねらいに基づき、スムーズに交流することができた。

2 研究指定園の実践

- (1) 「かけがわ型架け橋カリキュラム」を基に、小学校との情報交換を積み重ね、ジョイント活動を実践することを通して、目指す子供の姿が明確になった。子供にとって、豊かな経験を繰り返すことが大切であると再認識したと同時に、新たに課題となったのは、子供が発見や思いを言葉で表現し伝え合うことの必要性である。そのために、保育者が子供の姿を認め、言葉に耳を傾け、思いを引き出していくことを意識した。

- (2) 「かけがわ型架け橋カリキュラム」を基に、小学校と連絡を取り合い情報交換しながら実践することで、園小の接続について、年長児主任及び担任、主幹保育教諭の意識が高まった。しかし、園の職員全体の共通理解には課題があった。そこで、担当だけではなく園の職員全体で子供の姿を共有し、園小接続についての意識をもち、保育が展開できるように園内研修を行った。

3 研究指定小学校の実践

- (1) 校内で園小接続について教員と話をする、園での遊びの中にどのような学びがあるか具体的にイメージが湧いていないことがわかった。そこで、校内の研修に保育者にも参加してもらい、園での遊びの様子を紹介しながら、その中にどのような学びがあったか「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」と照らし合わせながら、保育者と一緒に語り合う機会を設定した。教員が、保育者と一緒に語り合うことで、遊びを通して学んでいることを具体的にイメージしたり、確認したりすることにつながった。

(2) 「かけがわ型架け橋カリキュラム」を基に、ジョイント活動を中心に、園と小学校で連携して実践を行った。令和6年度は、生活科「あそびにこうよ」の単元を重点とした。園での経験を小学校側が知ることにより、より子供の思考「やってみたい」に合わせた単元展開を行うことができた。一方、子供も思考に合わせることで時間が足りなくなるという単元の時間配分に課題が残った。

そこで、次のジョイント活動の生活科「あきとなかよし」では、単元のゴールの姿を子供と共有し、単元計画と一緒に考えることで、限られた時間の中で子供の思考を大切にしたい単元を展開することができた。また、ジョイント活動を重点的に行ったため、その他の教育活動においても、小学校教員が園での経験を想起する習慣が付き、電話で昨年度の様子を聞いたり、子供に「園でどんなことをしていた？」と尋ねたりして、実践を重ねていった。年度末に再びカリキュラムを見直し、次年度のジョイント活動をどのようにしていくべきか共有を図った。

5. 自治体の支援

5-1. 研修の実施

<実施した研修の概要>

令和4年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
令和4年 6月23日	第1回幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けた研修会	対面	幼児教育施設の保育者、小学校教員	・「幼児教育と学校教育の円滑な接続に向けて～『かけがわ型育ちと学びのジョイントブック』について～」 ・市立園年長児担任の実践事例発表 ・保育者と教員合同のグループワーク ・中学校区学園ごと円滑な幼小接続に向けた意見交換、協議
令和4年 11月25日	架け橋期の幼小接続に関する講演会（桜木小会場）	対面	桜木小職員、掛川こども園保育者他	・「かけがわ型架け橋カリキュラム」の開発について ・静岡大学教育学部教授 田宮 縁氏による講演「『かけがわ型架け橋カリキュラム』～幼児教育の基本から小学校教育への接続～」
令和5年 1月26日	第2回幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けた研修会	対面	幼児教育施設の保育者、小学校教員	・私立園年長児担任及び小学校1年担任の実践事例発表 ・「ジョイント活動」を基に保育者と教員合同のグループワーク ・中学校区学園ごと円滑な幼小接続に向けた意見交換、協議
令和5年 2月9日	架け橋期の幼小接続に関する講演会（大坂小会場）	対面	大坂小職員、おおさかこども園保育者他	・「かけがわ型架け橋カリキュラム」の開発について ・静岡大学教育学部教授 田宮 縁氏による講演「『かけがわ型架け橋カリキュラム』～幼児教育の基本から小学校教育への接続～」

令和5年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
令和5年 6月16日	第1回幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けた研修会	対面	幼児教育施設の保育者、 小学校教員	・静岡県幼児教育サポートチーム 宮村 典雄 氏による講話「幼児教育施設等と小学校との交流・連携の在り方について」 ・「ジョイント活動」を基に保育者と教員合同のグループワーク ・中学校区学園ごと円滑な幼小接続に向けた意見交換、協議
令和6年 1月23日	第2回幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けた研修会	対面	幼児教育施設の保育者、 小学校教員	・市立園園務主任及び小学校1年担任の実践事例発表 ・園小接続の取組について園・小学校の教育課程へ位置付ける内容について意見交換、協議 ・中学校区学園ごと円滑な幼小接続に向けた意見交換、協議
令和6年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
令和6年 6月6日	第1回幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けた研修会	対面	幼児教育施設の保育者、 小学校教員	・会場園長講話 ・園内参観 ・静岡大学教育学部教授 田宮 縁 氏によるエピソード研修
令和7年 1月23日	第2回幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けた研修会	対面	幼児教育施設の保育者、 小学校教員	・「かけがわ型架け橋カリキュラム」の開発について報告 ・研究指定園・小学校の実践発表 ・中学校区学園ごと円滑な幼小接続に向けた意見交換、協議

＜研修の成果と課題＞

1 令和4年度及び令和5年度の研修の成果

令和3年度まで年に1回開催していた「幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けた研修会」を、令和4年度より2回実施することができた。研修会では、本市の幼小接続の取組の周知、幼児教育施設の保育者や学校の教員による実践発表や県幼児教育サポートチームによる講話を行った。

また、グループワークを行い、保育者と教員と一緒に語り合う時間を設けた。ある遊びのプロセスの中に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、どのような姿が見られるか話し合ったり、「ジョイント活動」（4－1開発プロセス参照）をもとに、園での経験と小学校での授業内容とのつながりについて、具体的にイメージしながら、話し合ったりしたことで、幼児教育と学校教育の教育内容や指導方法について、相互理解の推進を図ることができた。研修参加者からは、「保育者と学校の教員が、実際に言葉で伝え合うことで、書面だけではわからない取組の内容や、活動のつながりを知ることができ、大変参考になった。」等の声が上がった。

さらに、令和5年度の第2回研修会では、園小別グループと中学校区毎の園小混合グループの2種類で、教育課程に位置付ける内容について情報交換をし、来年度以降の園小接続の取組が園・小学校全体の取組になるよう具体的な話し合いをすることができた。研修参加者からは、「弾力的な時間割の工夫等、教育課程に位置付けて目に見える形にすることで、誰が担任になっても円滑な接続ができるようにしたい。」や、「担任裁量ではなく、全職員で共通理解を図りたい。引継ぎの仕組みも工夫したい。来年度は各園・小学校の年間計画に、交流、保育・授業参観、研修会を位置付けることになった。」等の声が上がった。

2 令和6年度の研修の成果と課題

第1回研修会では、研究指定園を会場とし、園長講話や園内参観、開発会議委員長である静岡大学教育学部 田宮氏によるエピソード研修を実施した。令和7年度以降の各学園の一貫教育研修に生かすことができるよう、小学校からは教頭または主幹教諭・教務主任に参加を依頼した。園児の具体的な姿を基に話し合うことで、子供の見方や捉え方、幼児教育の学校教育への生かし方等について理解を深めることができた。小学校の研修参加者からは、

「学校の授業は、未だ授業者が何かをするという意識が強い。園の保育の、子供から『やってみたい、楽しそう。』を引き出す考え方を学びたい。」や、「エピソード研修による研修は、自学園の研修でも使いたい。学園で、保育参観後に、子供の育ちや学びを共感し合い話し合いたい。」等の声が上がった。

第2回研修会では、研究指定園・小学校の実践発表及び学園毎グループワークを実施した。来年度の「かけがわ型架け橋カリキュラム」の方向性の共有や「ジョイント活動」を核に保育・授業づくりのつながりについて話し合うことで、園小接続の必要性の認識が進むとともに、令和7年度以降の取組への期待や意欲を高めることにつながった。園の研修参加者からは、「園の取組を大切にしてくれていることに安心した。」や、「これからのジョイント活動に期待がもてた。来年度の活動が楽しみだ。」等の声が上がった。小学校の研修参加者からは、「園の先生から効果的な支援（援助）の方法や、環境づくり、学習のねらいに迫る活動のヒント等を学ぶことができた。」や、「栽培やお店屋さん、物作り等、園の取組の様子を知ることができたので、それを踏まえて生活科の授業を考えたい。」等の声が上がった。

また、「静岡県幼児教育の理解・発展推進事業都道府県協議会」を、公立園の保育者及び小学校教員の悉皆研修、私立園の希望研修とし、市の研修として活用した。研修参加者からは、「架け橋プログラムは、どちらかが進めるものではなく、双方から子供の姿をもとにして橋を架けるものだというイメージが具現化され、大変学びの深い一日だった。」等の声が上がった。

さらに、今年度は、研究指定園・小学校の保育及び授業を市内に公開することで、本市の

目指す園小接続のイメージを市内の保育者及び教員と一緒に膨らませることができた。年間を通して研修内容が充実し、幼児教育と学校教育の教育内容や指導方法について、相互理解の促進を図ることができた。

（各研修会参加者の声については、園小中接続便り「育ちと学びをつなぐ」参照）

3 研修の課題

全保育者と全教員の幼児教育と学校教育に対する相互理解が十分に進んだとは言えない。架け橋期に関わる保育者と教員や研究指定園・小学校の保育者と教員以外も、5歳児から小学校1年生の2年間の架け橋期は生涯にわたる学びや生活の基盤をつくるために重要な時期であるという認識が進むよう、幼小接続の推進を図る必要がある。

来年度以降も、年2回の幼小接続研修会を継続して実施するとともに、県主催の研修会や「かけがわ乳幼児教育未来学会」の研修会への学校の教員の積極的な参加を促す。

また、園小連絡会、幼小接続研修会、学園の一貫教育研修会など今ある研修会に「かけがわ型架け橋カリキュラム」の共有や見直しの内容を加え、持続可能な取組とする。

5-2. 教材等の作成

<作成した教材等の概要>

1 「かけがわ型育ちと学びのジョイントブック」(冊子) 資料3

(1) 作成のプロセス

令和2年度「園小中一貫教育研究委員会」を設置し、より実践的な幼小の円滑な接続に関して研究する中で、以下のような課題が明らかになった。

1つ目は、保育者と学校教員が、それぞれの幼児教育と学校教育に対する共通理解が進んでいないことである。園児と児童の交流、保育者と教師同士の交流、園から小学校への申し送り等に留まり、接続には至っていない。保育者と教員が、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、より長期的な視野に立った連携・協働を進め、幼児期から児童期への育ちのつながりをもとに、互いの教育内容、指導方法の違いや共通点に対する理解を進めていく必要がある。

2つ目は、カリキュラム・教育方法の充実・改善である。園ではアプローチカリキュラムを、小学校ではスタートカリキュラムをそれぞれ作成してきたが、学校教育では、幼児期に育まれている資質・能力について考慮されていないことが多く、小学校側の視点のみのカリキュラムになっていることが多い。幼児教育での育ちを生かしながら、学校教育での学びにつなげていくため、保育者と教員が、園や小学校での子どもの生活の流れや活動について共通の土台の上で理解を深めていく工夫が必要である。

それらの課題を解決していくため、令和3年度、「園小中一貫教育研究委員会」において研究を進め、「かけがわ型育ちと学びのジョイントブック」(冊子)を作成した。

(2) 域内への普及

市内の全保育者及び教員に配付し、市主催の研修会で活用したり、中学校区学園内の研修会で周知したりし、幼小接続の推進を図った。また、学園内の研修や幼児教育施設の保育参観に活用を促した。

2 「『かけがわ型架け橋カリキュラム』作成に向けて～幼児教育を学校教育へつなぐ～」(冊子) 資料4

(1) 作成のプロセス

令和4年度の「かけがわ型架け橋カリキュラム開発会議」において、「かけがわ型架け橋カリキュラム」は、幼児期の育ちや学びを小学校教育につなげるためのものであると捉え、在り方や共通の項目等について協議し「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver. 1」を作成した。

「かけがわ型架け橋カリキュラム」の捉え方や、幼児期の教育と児童期の教育の特徴について、そして、4-1開発プロセスで述べた「ジョイント活動」について等、令和4年度の開発会議で協議したことを「『かけがわ型架け橋カリキュラム』作成に向けて～幼児教育を学校教育へつなぐ～」(冊子)にまとめた。

(2) 域内への普及

市内の全保育者及び教員に配付し、中学校区学園内の研修や幼児教育施設の参観での活用を進めた。また、各種研修会において事務局から取組説明をする際にも使用した。

3 「幼児期の育ちや学びを学校教育につなげる～『かけがわ型架け橋カリキュラム』活用に向けて～」(冊子) 資料5

(1) 作成のプロセス

令和5年度及び令和6年度の「かけがわ型架け橋カリキュラム開発会議」において、開発会議委員が実際に研究指定園・小学校の保育及び授業を参観し、子供の姿や保育者・教

員の手立て（援助・指導等）について開発会議で協議をした。研究指定園・小学校の取組を踏まえた市全体へ周知する内容について、「園・校体制の取組」と「保育・授業づくり」の2つに分けてグループ協議を重ねた。

そして、3年間の研究の成果として、開発会議で協議された「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver. 2」の活用方法、園小接続に向けた組織体制づくり、保育・授業づくり等を「幼児期の育ちや学びを学校教育につなげる～『かけがわ型架け橋カリキュラム』活用に向けて～」(冊子)にまとめた。

今年度完成した「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver. 2」を、来年度から市内年長児在園の全園と小学校で運用を開始する。カリキュラムを作成することが目標になったり、カリキュラムと実践がつながらず作成するだけで終わってしまったりすることがないようにする必要がある。

本冊子に、「かけがわ型架け橋カリキュラム」の取組の流れを示し、今ある組織や会合を生かし、園小連絡会、幼小接続研修会、学園の一貫教育研修会で実践状況の共有や見直しを図り、計画的かつ効果的に取り組むことができるよう促していく。

また、「かけがわフェーズ」を4段階で示し、学園・園・学校の実態に合わせて進めることができるようにする。「中学校区学園化構想」を基盤に、学園を生かした組織体制づくりを構築する。

(2) 域内への普及

市内の全保育者及び教員に配付し、中学校区学園内の研修や幼児教育施設の参観での活用を進める。また、各種研修会において事務局から取組説明をする際に使用したり、「かけがわ乳幼児教育未来学会」の園経営研究部員が各学園の一貫教育研修に参加したりし、内容を周知する。

<教材等の成果と課題>

1 成果

市内の全保育者及び教員に配付し、中学校区学園内の研修や幼児教育施設の参観での活用を進めた。また、各種研修会において事務局から取組説明をする際にも使用することで、幼児期の教育と児童期の教育の特徴や、幼児期と学校教育のつながりについて理解を深めることができた。

冊子を活用した研究指定校の教員からは、「生活科の授業を考えるにあたり、掛川市作成の冊子を何度も見た。1年生の児童は、できない、教えなければならないという存在ではなく、園で様々なことを経験し、多くのことができるようになったと自信をつけてきた存在であるとの認識が変わった。冊子を参考にして、『学びの芽生えから自覚的な学びへ』と『気付きの質を高める』の2つを授業づくりのポイントとして押さえた。この冊子は大変参考になる。」という声があった。

また、冊子には、子供の言葉を吹き出しで記載したことで、冊子を使用した研修会参加者からは「『幼児期の終わりまでに育てほしい姿(10の姿)』や『ジョイント活動』について具体的にイメージすることができ、子供の姿が捉えやすい。」という声が上がった。

2 課題

市内の全保育者及び教員に配付したが、研修参加者や研究指定園・小学校の保育者と教員以外の保育者や教員が、冊子を十分に活用できているとは言えない。

来年度から、「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver. 2」を市内年長児在園の全園と小学校で運用を開始するにあたり、各種研修会において事務局から冊子の活用方法を周知する。また、各園・小学校の研修や中学校区学園内の研修や幼児教育施設の参観での活用を進める。

5-3. その他の支援

<その他の支援の概要>

1 園小中接続便り「育ちと学びをつなぐ」発行

(1) 市内の保育者と小中学校教員対象

幼児教育と学校教育の教育内容、指導方法の相互理解の推進のため、市内の全保育者と小中学校の教員を対象に、事務局から「育ちと学びをつなぐ」（通信）を配付した。

令和5年度は、「かけがわ乳幼児教育未来学会」のキャリアアップ研修における静岡県立大学短期大学部教授 永倉氏の講話や、「かけがわ教育の日」の東京大学名誉教授 汐見氏の講話についても紹介し、幼児期の育ちや学びを学校教育につなげる手掛かりとなる内容を周知した。

令和6年度は、各種研修会の内容に加え、4月の小学校1年生の様子と小学校の取組内容や研究指定園・小学校の保育・授業公開での育ちと学びをつなぐ子供の姿等を紹介した。具体的な取組内容や子供の姿を紹介することで、幼児期の育ちや学びを学校教育につなげるとはどういうことなのかを理解し、自園及び自校の取組に生かすことができる内容を周知した。

ア 令和4年度 資料6

第1号 第1回幼小接続研修会内容

第2号 お互いにとってメリットがある、園小中接続へのきっかけづくり

第3号 環境づくりの工夫（園・小学校）、小学校1年生の授業での発問の工夫

第4号 第2回幼小接続研修会内容

イ 令和5年度 資料7

第1号 第1回幼小接続研修会内容、研究指定園・校訪問後の開発会議協議内容等

第2号 小学校入学説明会に向けて、かけがわ乳幼児教育未来学会研修会内容等

第3号 「かけがわ教育の日」汐見教授の基調講演内容、研究指定園・校訪問後の開発会議協議内容、市内全園への絵本配付について等

第4号 第2回幼小接続研修会内容、市内全園への鉛筆配付について

第5号 本年度の開発会議協議内容のまとめ、保護者への周知について等

ウ 令和6年度 資料8

第1号 4月の小学校1年生の様子と小学校の取組内容、職員の学びの場の紹介等

第2号 研究指定園・小学校の保育・授業公開での育ちと学びをつなぐ子供の姿等

第3号 静岡県幼児教育の理解・発展推進事業都道府県協議会内容、特別支援教育に関する講話内容等

第4号 研究指定園・小学校の保育・授業公開での育ちと学びをつなぐ子供の姿等

第5号 第2回幼小接続研修会内容、「かけがわ型架け橋カリキュラム」の作成について等

第6号 研究指定園・小学校の実践より園小の円滑な接続が進むと見られた変容、開発会議協議内容のまとめ

(2) 市内の園と小学校1、2年生児童保護者対象 資料9

幼児教育と学校教育のつながりや取組を保護者に周知するため、市内の園と小学校1、2年生児童保護者を対象に、事務局から「育ちと学びをつなぐ（保護者用通信）」を配付した。

第1号 「架け橋プログラム」について、園での遊びは学びであることの説明（こども希望課作成）

第2号 園での育ちや学びをつなぐための小学校の取組の紹介（学校教育課作成）

2 園・校長会、教頭研修会、主幹教諭・教務主任研修会での周知及び働きかけ

研究指定園・小学校長のみではなく、市立園長と市内全小中学校長に対して周知し、園長・校長のリーダーシップのもと、園小接続を園・学校全体のものにしていくよう推進した。また、教頭研修会や主幹教諭・教務主任研修会でも周知し、本市全体として、園小接続が担当職員だけに留まることなく、学校全体で取り組む校内体制の必要性の理解を促した。

令和5年度は、これまで園小接続の取組が年長担任及び1年生担任だけに留まっていたという課題を受け、園・校全体の取組となるよう各校の教育課程へ位置付けることを依頼した。

令和6年度は、校長会で開発会議副委員長である担当校長が、全校で園小接続に取り組む価値を説明した。また、主幹教諭・教務主任研修会では、研究指定小学校の主幹教諭及び教務主任が、学校体制で園小接続に取り組んだ実践を発表した。

6. 本事業に取り組んだことによる成果

6-1. 自治体における成果

<自治体における成果>

1 関係機関と連携した研究推進体制の構築

開発会議の委員に、公私立を問わず市内乳幼児教育施設が加盟している「かけがわ乳幼児教育未来学会」の理事を選出したり、「かけがわ乳幼児教育未来学会」による研修（2-3. 協力団体等参照）への学校の教員の積極的な参加を促したりしたことで、これまでの本市で構築されてきた「かけがわ乳幼児教育未来学会」と学校教育課の連携を一層強化することができた。

また、開発会議委員に、県義務教育課幼児教育推進室教育主任をアドバイザーとし、支援・助言を受け、開発会議や研修会の運営を行った。令和6年度は、文部科学省及び県が主催する「静岡県幼児教育の理解・発展推進事業都道府県協議会」を本市の研修として活用したり、県義務教育課幼児教育推進室長等が開発会議を視察したりしたことで、県義務教育課幼児教育推進室との連携が促進された。さらに、上記協議会では、本市が実践発表をし、文部科学省初等中等教育局幼児教育課調査官から指導講評をいただいたり、「かけがわ乳幼児教育未来学会」の総会において、白梅学園大学名誉教授 無藤氏に講演していただいたりすることで、文部科学省との連携を図ることができた。

令和5年度及び令和6昨年度は、開発会議の委員の中に、研究指定園の5歳児担任や研究指定校の1年担任及び1年主任を選出し、園・小学校の状況や課題を開発会議で把握し、必要な援助を行うことができた。また、研究指定園・小学校だけではなく、市内の園小中接続の状況把握に努めた。各校及び「中学校区学園化構想」のもと9つの中学校区に分けた「学園」の部会や窓口の設置、職員の研修、子供同士の交流等についての状況を把握した。さらに、学校教育課とこども希望課が、市内の幼児教育施設と小学校を訪問し、園小接続に関する取組の好事例を収集し、市全体へ発信することで、市内の各学園内の幼児教育施設と小学校における円滑な接続を目指した。

2 園小接続の推進、研修の充実

令和3年度まで年に1回開催していた「幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けた研修会」を、令和4年度より2回実施することができた。（5-1. 研修の実施参照）特に令和6年度の第1回研修会では、研究指定園を会場とし、園長講話や園内参観、開発会議委員長である静岡大学教育学部 田宮氏によるエピソード研修を実施した。園児の具体的な姿を基に話し合うことで、子供の見方や捉え方、幼児教育の学校教育への生かし方等について理解を深めることができた。第2回研修会では、研究指定園・小学校の実践発表及び学園毎グループワークを実施した。来年度の「かけがわ型架け橋カリキュラム」の方向性の共有や「ジョイント活動」を核に保育・授業づくりのつながりについて話し合うことで、園小接続の必要性の認識が進むとともに、来年度以降の取組への期待や意欲を高めることにつながった。3年間を通して研修内容が充実し、幼児教育と学校教育の教育内容や指導方法について、相互理解の促進を図ることができた。

学校教育課が中心となり、こども希望課と連携を図りながら、幼児教育及び小学校教育の充実並びに園小の円滑な接続を図るための取組を、一体的に推進してきた成果として、「静岡県幼児教育の理解・発展推進事業都道府県協議会」の他市町参加者の声は以下のとおりである。

- ・掛川市の実践は、行政が主導しているところに大変価値がある。同じことをやろうとしても、一園・一校単位でできることではないと感じる。市町単位でやる必要がある。
- ・公立及び私立園と小学校が共通理解をして取り組むためには、掛川市のように仕組み作りが必要である。

- ・掛川市のように、市全体で相互の教育について学ぼうという姿勢が浸透するようにしたい。
- ・掛川市は、園小中の横や縦の繋がりと行政の連携が見られ、子供を中心においた取組をみんなで行っている。

＜定量的・定性的な調査結果＞

関係者の意識の変容については、「幼保小の架け橋プログラムのモデル地域における成果に係る調査研究」（Gakken）のアンケート調査結果を、掛川市では活用してきた。令和4年度と令和5年度の調査結果からは有用と考える調査結果の項目はなく、令和6年度の送付が現時点ではないため、本報告書への記載は見送る。

取組の成果については、各校で毎年実施している「学校評価結果報告書」より、研究指定校の結果から特に有用と考える項目についてを以下に上げる。

（学校評価の対象者は全校児童。）

【研究指定校（桜木小学校）】

- | | | | |
|--------------------|-------------|-------------|-------------|
| ・自分の考えを伝えている | 令和4年度 83.8% | 令和5年度 85.1% | 令和6年度 89.3% |
| ・友達と話すことでわかるようになった | 令和4年度 95.2% | 令和5年度 95.2% | 令和6年度 96.4% |
| ・自分にはよいところがある | 令和4年度 90.7% | 令和5年度 88.5% | 令和6年度 91.2% |
| ・学校が楽しい | 令和4年度 94.7% | 令和5年度 91.8% | 令和6年度 94.8% |

【研究指定校（大坂小学校）】

- | | | | |
|---------------|-----------|-----------|-------------|
| ・授業が楽しい | 令和4年度 90% | 令和5年度 90% | 令和6年度 91.3% |
| ・自分にはよいところがある | 令和4年度 83% | 令和5年度 87% | 令和6年度 91.5% |

6-2. 園校における成果

<先生方の指導と子供の姿の変容>

研究指定園・小学校の子供の姿の変容と教職員の指導の変容

教職員が子供の捉え方を変えて接した*ことで、子供の姿に様々な変容が見られました。これが円滑な接続に取り組む良さです。その一部を紹介します。

※教職員が子供の捉え方を変えるとは、例えば、「園児の遊びや生活の中に学びがある」、「園児の遊びは児童の学びに通じる」、「園児の夢中になって繰り返し遊ぶ姿は探究の基礎となる」等の捉え方をすることです。詳細は、本書のp.9～12に記載しています。

園児の姿の変容

経験したことを思い出しながら、考えていることを言葉で伝える
園児の姿の増加



泡に色をつけた
いから色水
がほしいな。

円滑な学校生活の
スタート



園の環境を
生かした場で
子供が安心して
学習

児童の姿の変容

主体性を発揮する児童の姿の増加



ブロックで
考えると説明
できるよ。

今日は、
ブロックで
考えよう。

小学生になった自分をイメージ



小学校に
入ったら私
も作りたい。



小学校は、
こういうところ
なんだな。

小学校への期待・憧れ



1年生は
優しいな。

小学校への
不安解消



小学校が
楽しみ。

友達と協働的に関わる
児童の姿の増加

せーので
やろう。



どう思う？



登校渋りの児童の減少

3

保育者・園の変容

教員・小学校の変容

園と小学校の関わりが増え、**顔が見える親しい関係**になった。

互いの保育・授業参観の時に、保育者・教員の意図を考えたり、園と小学校のつながりを意識したりするようになった。

保育への意欲が高まった。

園から小学校＝人生の中の
初めての接続という大切な
期間を担っていると再認識

保育の見直しにつながった。

園の遊びが小学校の学びに
どのようにつながるかが分
かった。

子供たちが**様々な体験・
経験**をするように心掛けた。

入学当初の時間割を弾力的にした。

小学校1年生はゼロからのスタートではなく、**園での
遊びを通した経験が土台**になっているという意識の変化。

園での経験を生かした**子供主体の授業づくり**へ

- ・教員が子供の「〇〇したい」を引き出す。
- ・教員が子供の持っている力を引き出す。
- ・教員が園小接続以降6年間での発達段階に応じた子供の育成を意識する。
- ・子供が見通しをもつ。
- ・子供が課題解決に向かう方法を自己選択する。
- ・子供が協働的に学ぶ。

「幼児期の育ちや学びを学校教育につなげる～『かけがわ型架け橋カリキュラム』活用に向けて～」(冊子)より

<保護者の反応>

1 研究指定園の保護者の反応

- (1) 参観懇談会の時に、架け橋プログラムの取組の話をした。小学校の教員から、「1年生当初は、登校班での登校や給食準備・片付け等につまずきがあると聞いた。」と話し、就学前に親子でもできることを伝えと、保護者から「このような取組のおかげで、様々な細かな話が聞けてありがたい。安心する。」という声があった。
- (2) 小学校1年生との交流について、1回目は圧倒されていた子が、2回目は少し慣れて小学生との交流ができたことを保護者に話すと、「何回か小学生と交流したことで、小学校のことがいろいろわかってきたようで、1年生から聞いてきたことを、家にある入学用品を見せながら教えてくれた。」と話す保護者がいた。
- (3) 保護者から、「勉強を教えるのではなく、生活でのつまずきを小学校入学前に減らしてもらえるのはうれしい。」という声があった。

2 研究指定小学校の保護者の反応

- (1) 学校運営協議会で、架け橋プログラムについて説明し、地域の方や保護者代表の方に取組を理解してもらい、好評を得た。「園小の接続として大変良い取組をしている。このことをもっと保護者や地域に発信してほしい。」という意見があった。
そこで、年度当初のPTA総会の学校説明会、地域に向けた学校紹介、新1年生保護者に向けた入学説明会等で、「かけがわ型架け橋カリキュラム」の実践を具体的な姿を示しながら紹介した。少しでも多くの地域の方や保護者に発信するようにした。
- (2) 学年便り等で授業の内容やねらいを保護者に示したことで、保護者が協力的になった。また、ねらいを示したことで、子供の「やってみたい」を尊重して材料等を用意してくれた。例えば、これまでは、泡遊びの活動を行うと既製品を持ってくる児童もいたが、自分の「やりたい」という思いを大切に、材料を用いて創作することができるようになったのは、保護者の理解度が高まったからだと考えられる。
- (3) 学年便りや授業参観を通して、園での経験を生かした学びや、子供が安心して力を発揮できるような教員の声掛けや環境設定をしていることを発信してきたことで、保護者から「子供が自分から学んでいる姿が見られる。」や「学ぶことが楽しそう。」等の感想があった。
以下、学校評価アンケートでの1年生保護者の回答である。
「『苦手なんだよ…』と言っていた算数が、この頃『好きになってきた。』とよく言うようになった。考える、分かることが楽しいと感じられている理由が、授業参観をさせていただき、よく分かった。学びの土台ができてきて、ありがたい。」

7. 今後の課題と展望

1 市内園・小学校による「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver. 2」の作成・運用

(1) 「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver. 2」の作成・運用について

今年度完成した「かけがわ型架け橋カリキュラム Ver. 2」を、来年度から市内年長児在園の全園と小学校で運用を開始する。

各種研修や会合等及び「育ちと学びをつなぐ」（通信）で活用方法等を周知したが、カリキュラムを作成することが目標になったり、カリキュラムと実践がつながらず作成するだけで終わってしまったりすることがないようにする必要がある。

今年度作成した「幼児期の育ちや学びを学校教育につなげる～『かけがわ型架け橋カリキュラム』活用に向けて～」(冊子)に、「かけがわ型架け橋カリキュラム」の取組の流れを示し、今ある組織や会合を生かし、園小連絡会、幼小接続研修会、学園の一貫教育研修会で実践状況の共有や見直しを図り、計画的かつ効果的に取り組むことができるよう促していく。

(2) 関係機関と連携した研究推進体制の構築（2－1．組織図・体制図参照）

各園・校における意識や取組の差をなくし、園小接続の取組が位置付けられるように、来年度は、全学園の組織に接続部会を設置する。また、「幼児期の育ちや学びを学校教育につなげる～『かけがわ型架け橋カリキュラム』活用に向けて～」(冊子)に、「かけがわフェーズ」を4段階で示し、学園・園・学校の実態に合わせて進めることができるようにする。「中学校区学園化構想」を基盤に、学園を生かした組織体制づくりを構築する。

さらに、「かけがわ乳幼児教育未来学会」の園経営研究部員が各学園の一貫教育研修に参加し「幼児期の育ちや学びを学校教育につなげる～『かけがわ型架け橋カリキュラム』活用に向けて～」(冊子)の内容を周知することで、これまで本市で構築されてきた「かけがわ乳幼児教育未来学会」と学校教育課の連携を一層強化する。

2 園小接続の推進、研修の充実

(1) 幼児教育施設の保育者と学校の教員対象研修の実施

研究指定園・小学校の保育者と教員以外にも、幼児教育と学校教育の教育内容や指導方法について、相互理解の推進を図る必要がある。来年度以降も、年2回の幼小接続研修会を継続して実施するとともに、県主催の研修会や「かけがわ乳幼児教育未来学会」の研修会への学校の教員の積極的な参加を促す。

また、園小連絡会、幼小接続研修会、学園の一貫教育研修会など今ある研修会に「かけがわ型架け橋カリキュラム」の共有や見直しの内容を加え、持続可能な取組とする。

(2) 幼児教育と学校教育の接続に関する資料の活用

来年度以降も「かけがわ型ジョイントブック」や「かけがわ型架け橋カリキュラム作成に向けて～幼児教育を学校教育へつなぐ～」(冊子)の資料を活用し、架け橋期の接続をより一層推進する。

また、3年間の研究の成果として作成した「幼児期の育ちや学びを学校教育につなげる～『かけがわ型架け橋カリキュラム』活用に向けて～」(冊子)を、各種研修会での事務局からの取組説明で活用したり、中学校区学園内の研修や幼児教育施設の参観での活用を促したりする。

(3) 幼児教育と学校教育の共有と理解のための周知及び連携の強化

今年度は市内の園と小学校1, 2年生児童保護者を対象に、事務局から「育ちと学びをつなぐ」(保護者用通信)を発行し、幼児教育と学校教育のつながりや取組を保護者に周知した。今後も、各園・小学校において、園便りや学校便り、保護者説明会等で、保護者に幼小接続の取組を紹介することを促す。

また、地域への周知は十分ではないため、学園の関係者が集う会や学校運営協議会等で地域の方へ周知し、地域との連携も図りたい。

8. まとめ

1 園小接続のために必要だと考えること

(1) 園小接続のためには、まずは、互いに歩み寄ることが重要である。そのために、相互の教育内容や方法を理解すること、互いの保育・教育活動を尊重しそれぞれの専門性を発揮すること、その上で園では育ちと見通しをもった保育を、小学校では育ちと学びのつながりをふまえた教育を行うことが重要である。

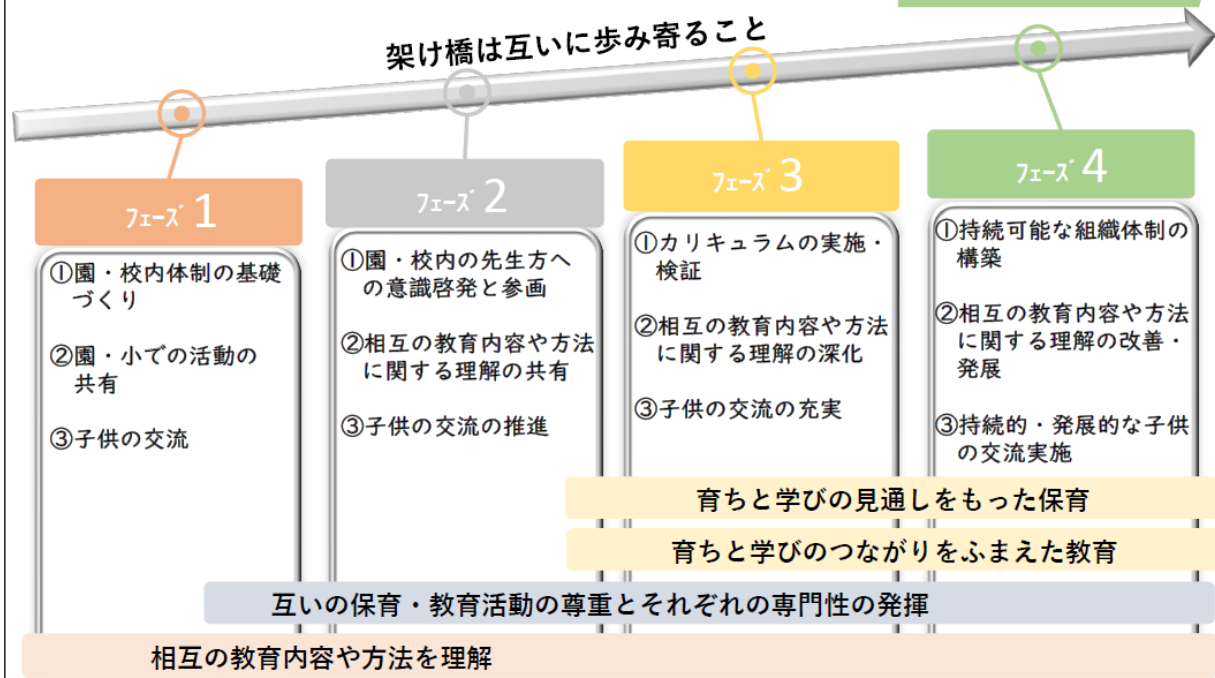
掛川市では、上記に述べたことを促進するために、下記のとおり「かけがわフェーズ」を4段階で示し、学園・園・学校の実態に合わせて進めることができるようにする。

3 かけがわフェーズ

あなたの学園、園・学校はどの段階ですか？

学園、園・学校の実態に合わせて、複数年かけてフェーズ4を目指しましょう。

子供が主体的に
自己を発揮しながら
学びに向かう



「幼児期の育ちや学びを学校教育につなげる～『かけがわ型架け橋カリキュラム』活用に向けて～」(冊子)より

(2) (1)の相互の教育内容や方法の理解を促進するためには、組織体制づくりが必要である。園小接続の取組が年長担任及び1年生担任だけに留まることなく、園・校全体の取組となり、一小学校、一園単位ではなく、小学校区または中学校区で取り組むことで、保育者及び教員の理解を図ることができると考えるためである。

掛川市では、次ページのとおり学園を生かした組織体制づくりを構築する。

4 学園を生かした組織体制づくり～互いの教育の理解促進を～

園・小学校

- ① 園・小の教育課程に園小接続の取組（カリキュラム等）を位置付ける。
- ② 地域や保護者へ園小接続の取組を周知する。→ 園・学校便り、小学校入学説明会

小学校区

① 園小連絡会の活用

【メンバー】園務主任と年長担任、主幹教諭・教務主任と1年生担任。

（副園長、教頭、養護教諭等各小学校区の実態に応じて）

- 【第1回内容】・1年生の子供の姿を見て、育ちを共有する。
・カリキュラムを基に、実際の子供の姿から保育・授業のつながりを話し合う。
- 【第2回内容】・年長児の子供の引継ぎをする。（資料は市内同じ様式）
・園・学校生活について以下を参考にして互いに聞き合う。

園から小学校に質問する内容例

- ・入学当初に生活面で子供が難しさを感じる場面（着替え、給食、手洗い、トイレ等）
- ・1日の生活の流れ（特に4、5月）
- ・4、5月の時間割や授業内容
- ・給食の配膳の仕方
- ・登校や下校の様子
- ・生活のきまりや約束

小学校から園に質問する内容例

- ・1日の生活の流れ（朝の会、給食、帰りの会等）
- ・年度末のカリキュラム（月案、週案、日案）
- ・1年生に向けて取り入れていること
- ・年長時に特に大切にしている行事や核となる取組
- ・係活動や当番活動
- ・座って行う活動の内容と時間
- ・自己肯定感につながる取組

② 職員の交流（以下は取組例）

- ・夏休み等に学校の教員が園に行く。知り合うことから始める。
- ・1年生担任が、園の前年度年長児担任に、ジョイント活動の取組内容（環境づくり、子供の様子等）を聞く。
- ・互いの職員会議や園・校内研修に参加する。
- ・公開保育・授業期間を設けるなど、互いの保育・授業を気軽に見合う。

学園

※学園の規模や実態に応じて柔軟に取り組む。



・ジョイントブック
・『カリキュラム』
作成に向けて

① 接続部会の設置※

【メンバー】園務主任と年長担任、主幹教諭・教務主任と1年生担任。

【第1回内容】・昨年度末に前任が作成したカリキュラムを、今年度の子供の実態に合わせて加除修正したものを持ち寄り、目指す子供の姿等を共有する。
・学園で統一したジョイント活動の一つ位置付ける。

【第2回内容】・ジョイント活動を核に、今年度の実践の振り返りをする。
・次年度のカリキュラムの方向性（目指す子供の姿、職員と子供の交流計画）を共有する。

【報告】接続部会の協議内容を当番校の主幹教諭・教務主任が事務局（学校教育課）に報告する。

② 園・学校の公開保育・授業の事前事後研修の実施※

- ・公開保育・授業前：園長・校長が幼児教育・学校教育について話をする。
- ・園の参観の視点：子供の遊びの姿から何に夢中になって楽しんでいるか。
遊びの中でどのような力が育成されているのか。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに育ちを支える園の先生のかかわりや環境づくりについて。等
- ・公開保育・授業後：園・小・中混合グループで視点に沿って協議する。
市作成の「かけがわ型育ちと学びのジョイントブック」と「『かけがわ型架け橋カリキュラム』作成に向けて～幼児教育を学校教育へつなぐ～」の2冊を活用する。

市主催の研修会

① 幼小接続研修会（幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けた研修会）

【対象者】園務主任または年長担任、主幹教諭・教務主任または1年生担任。

【第1回内容】・小学校区または学園で、今年度実施するジョイント活動について語り合い、互いの教育の理解を深める。
・カリキュラムを持ち寄り他園・校と情報交換をする。

【第2回内容】・今年度のジョイント活動の実践を中心に他園・校と情報交換する。
・小学校区または学園で、次年度のカリキュラムについてジョイント活動を核に保育・授業のつながりを話し合う。

② 2年次研修幼稚園参観（学園内の園で実施）



「幼児期の育ちや学びを学校教育につなげる～『かけがわ型架け橋カリキュラム』活用に向けて～」(冊子)より

2 園小接続の促進のために自治体が果たす役割

(1) 自治体内の関係部局との連携及び関係機関との連携

架け橋カリキュラム作成だけではなく、就学支援や外国にルーツのある子供への支援等、園小の課題や取組などに関して担当部局が連携し、園・小学校の取組を支える基盤をつくる。

また、園においては、公私立及び施設類型に関わらず横の繋がりがもてるよう、自治体が関係団体と連携を図る必要がある。掛川市は、「かけがわ乳幼児教育未来学会」（2－3．協力団体参照）との連携を強化する。

(2) 研修の実施、充実

自治体主催で合同研修会を実施し、講話や実践発表、保育者と教員を同一グループにしたグループワーク等を行い、市内全域の園・小学校の相互理解を促進する。また、研修参加者の声や、実際に園及び小学校を訪問し、市内の園・小学校の実態を把握し、実態に応じた研修内容へと発展させていく。

さらに、研修会で架け橋カリキュラムの共有や見直しを図り、カリキュラムを基に保育者と教員が語り合う場を設定する。掛川市は、下記のように取組の流れを示し、持続可能な取組となるようにする。

8 「かけがわ型架け橋カリキュラム」の取組の流れ

以下のスケジュールを基本にして、「かけがわ型架け橋カリキュラム」に取り組みましょう。

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
01	02	03	04						05	06	07	08
第一回学園接続部会 今年度カリキュラム完成	第一回園小連絡会	第一回幼小接続研修会	カリキュラム見直し 学園全体研修会 公開保育・授業 一貫教育研修会						第二回学園接続部会	第二回幼小接続研修会	第二回園小連絡会	次年度カリキュラム(案)作成
(各園・校)カリキュラムに基づいた実践、実践記録の蓄積						(学園、小学校区)実践状況の共有、見直し						

01 第1回学園接続部会	02 第1回園小連絡会	03 第1回幼小接続研修会	04 一貫教育研修会
昨年度末に前任が作成したカリキュラムを、今年度の子供の実態に合わせて加除修正したものを持ち寄り、共有する。 <u>学園で統一したジョイント活動を一つ位置付ける。</u>	①1年生の子供の姿を見て、育ちを共有する。 ②カリキュラムを基に、実際の子供の姿から保育・授業のつながりを話し合う。	①小学校区または学園で、今年度実施するジョイント活動について語り合い、互いの教育の理解を深める。 ②カリキュラムを持ち寄り他園・校と情報交換をする。	①保育・授業を見合い、全職員の互いの教育の理解を深める。 ②カリキュラム実施状況の共有と見直しをする。
05 第2回学園接続部会	06 第2回幼小接続研修会	07 第2回園小連絡会	08 次年度カリキュラム作成
ジョイント活動を核に、今年度の実践の振り返りと、次年度のカリキュラムの方向性（目指す子供の姿、職員と子供の交流計画）を共有する。	①今年度のジョイント活動の実践を中心に他園・校と情報交換する。 ②小学校区または学園で、次年度のカリキュラムについてジョイント活動を核に保育・授業のつながりを話し合う。	①年長児の子供の引継ぎをする。 ②園・学校生活の一日の流れ等について互いに聞き合う。（p.7参照）	今年度の成果と課題をふまえ、学園接続部会と幼小接続研修会の話し合いを基に、担任・学年部を中心に次年度のカリキュラムを作成する。実践できそうなジョイント活動をカリキュラムに複数位置付ける。

上記は、本書のp.7,8の **園・校** **小学校区** **学園** **市** の取組内容と連動しています。

14

「幼児期の育ちや学びを学校教育につなげる～『かけがわ型架け橋カリキュラム』活用に向けて～」(冊子)より